

# 「公開ワークショップ 学生の主体性と協同性をひきだす授業デザイン」開催報告

宮城学院女子大学 一般教育部 間瀬 幸江

2017年12月16日（土）、宮城学院女子大学FD推進委員会との共催で「公開ワークショップ 学生の主体性と協同性を引き出す授業デザイン」が行われた。対話型の授業デザインに関する研究の第一人者である、言語教育学の今中舞衣子氏<sup>1</sup>を報告者に迎えての開催である。参加したのは、大阪産業大学、東北大学、弘前大学、宮城学院女子大学の学生と教職員（計35名）<sup>2</sup>。ワークショップ型の授業デザインについて、ワークショップ形式で考えるという、形式と内容の入れ子構造の90分間を終えて提出された来場者アンケートの回収率は、実に9割を越えた。協力を求められての回答というよりは、自分が経験したことを書き残したいという主体性が伝わってきた。

感想の大半を占めたのが、多様な人々が集まり、場を共有し対話を行うことはそもそも面白い、という意見である。普段は教壇の向こう側にいる「あの先生」や、教室で向かい合う「あの学生たち」、学事を担当する「あの人たちが自分の隣に座り、自分の話に耳を傾け、自分もまた言葉を返すなか、普段は得られない知見が得られる。しかも、参加者の在籍する大学は4つ、それぞれに地域も特色も異なることが、得られる知見の深さと多様性を生む。

ところが、「アクティヴ・ラーニング型の授業をやらうとしてもなかなかうまくいかない」（30代教員）「対話型の導入は考えてもみなかった」（50代教員）など、参加者の多くが日頃、他人とフラットな関係で意見交換をする経験を、教場でほとんど持ってこなかったか、あるいは多かれ少なかれ苦手意識を持っていた。それでは、「このワークショップでは（自分はずいとは）全然違いました。もっと話したい、もっと聞きたいと思えました」（学部生）との感想は、なぜ生まれたのか。このことについて、企画立案にかかわった視察者（筆者はワークショップには参加せず、会



フライヤー。教育に関わっているさまざま参加者を募ろうと、職種や年齢等を問わない企画である旨明記した。

<sup>1</sup> 大阪産業大学国際学部准教授。フランス語教育学会幹事長。リール・カトリック大学講師、京都教育大学講師等を経て現職。フランス語教授法、対話型の教育実践についての研究多数。

<sup>2</sup> 報告者と企画者の専門領域の影響で、全体の6割が、フランス語の教員または学習者であった。ただしワークショップは、語学教育をテーマとしながらも、語学力を必要としない内容だった。

場を外側から観察した)の立場から、企画の内容と運営の両側面から振り返りたい。



アイスブレイク。簡単な自己紹介が、参加者のレディネスを上げる最初の足がかりとなる。

まずアイスブレイクとして、「名前の50音順に輪になって並ぶ」という指示により、参加者は名前を互いに伝え合って大きな円をつくり、続いて名前、職業、学んでいる(いた)外国語を述べるごく簡単な自己紹介を一人ずつ行う。このとき、他の人の自己紹介の内容をできるだけ覚えておくよう指示が出される。これが終わると、自分とはできるだけ異なる人と4人グループをつくって着席するというタスクが続く。そして「学生の主体性と協同性を引き出す授業デザイン」というタイトルから抱くイメー

ジを書き出す、という数分のブレインストーミングをし、グループでこれについての意見共有がなされ、続いてファシリテーターから、事前に準備されていた知見の提示がある。この後、今中氏が所属大学で担当する授業(フランス語)内での授業デザインに係る事例を提示し、各事例の教育的効果をグループで話し合い、そしてまた氏からの知見の提示、という流れが繰り返される<sup>3</sup>。ワークショップの終盤には、まとめとしてワークショップのテーマの再検討に10分間たっぷり自由討論が行われる。この流れのなかで、グループのうち1人を残し3人が別のグループにバラバラに移動して即席の4人グループを形成、そこでまた意見共有をし、再びもとのグループに戻って今しがたの別メンバーでの話し合いを共有し合う。最後に、ワークショップ運営に用いられた手法とその意義についてのリフレクション(ふりかえり)の時間が持たれた。

アイスブレイクからリフレクションまでの90分間で、参加者たちの間に、ゆるやかな共同体意識が育まれ始めた。最初は戸惑ったりシドロモドロだったりした参加者でも、時間が経つにしたがってグループの中で意見を聞き合うことに前向きになっていった。「学校や学年、立場が違う人たちと意見を交換でき(普段と違う環境で)刺激を受けた。会話がだんだんはずんでいき、グループの一体感が生まれたことを感じた」(学部生)「4人のグループの中で、私以外の3人の学生さんは、ブレインストーミングの時点ではなかなか書けないと悩んでいたが、ワークが進むにつれてとても活発に意見を出してくれ、このワークショップ運営が成功していることを肌で実感した」(大学院生)また、「どうしたら1人ぼっちにならず、みんなで仲良く楽しく学べるか」(学部生)と、苦手意識を問いの形で言語化・距離化したり、「よい学生」「よい先生」のステレオタイプ化という問題系に気づき、「内

<sup>3</sup> 提示された事例は全部で7つ。「グループ編成について：毎回違うメンバーで着席させる」「文法規則の学習：文法規則は教師が教えるのではなく、グループで考えて見つけてもらう」「ワークシートの小課題：90分授業のなかで3回ほど、書かせる小課題を出す」「答え合わせの方法：指名するときはグループ単位で指名する」「ふりかえり：授業の最後に、その日に学んだことをワークシートに記入」「ランゲージカフェ：フランス人チューターのアシスト」「特別活動：ゲスト講師、イベント公募、暗誦大会参加、学外研究会、研修旅行など、「転移」「越境」の経験」

向的な人、一般的な「先生が好むタイプの学生」以外の人も主体的に参加できるような授業」(大学院生)の可能性を考えてみたくなったりなど、対話が進む中、協同して学ぶことをめぐる新たな問いに行きあったグループもあった。

他方、アンケートに目を通した今中氏からは後日、「レディネスある参加者が多かった」とのコメントをいただいた。もっとも、そのことは氏の意向を聞きながらの事前準備の成果でもあったように思われ、したがって、運営準備もまた広い意味でワークショップデザインの手法の一つであったと言えそうである。というのは、筆者はかつて、フランス語教育の研究会で、今中氏が主宰するワークショップ形式の実践報告に参加し、初対面の人びとと意見交換をする興味深さを経験しており、それを本学のフランス語教育関係者や学生たちにも知ってもらいたいと考えて本企画を依頼したのだが、その折に、「学生、教員だけでなく、職員や地域の方々など、教育に関わりたいすべての人を対象にしたい」との要望を受けた。しかしもともと、キリスト教文化研究所の「多民族社会における宗教と文化」共同研究グループでの開催に「ふさわしい」ように、フランス語・フランス文化に係るレクチャーを、主として外国語科目担当教員とその学生の10数人程度のこぢんまりとした聴衆を念頭において想定していたので、「フランス語」よりもむしろ「教育」に比重を置くこの要望は、想定外だった。また、大学職員や地域の方々まで対象に含めるとなると、研究会としての専門性のレベルをどう設定するかも問題となる。しかも、この要望と同時にお預かりした「学生の主体性と協同性を引き出す授業デザイン」という企画のタイトルは、本研究グループの研究会というよりは、FD研修会を思わせた。迷いながらそれでもとにかく、日ごろフランス語の授業実践のための意見交換をしている教員、フランス語を履修中かまたは履修したことのある学生、その他フランス語に関係はなくても本学で対話型の授業や研修づくりなどに興味を持っていると思しき教員や職員に開催情報が届くよう、教授会でも月をまたいで二度にわたりアナウンスを行うとともに、東北大学のフランス語教育関係者にも情報を意識的に流し、参加型の授業づくりや研修づくりに興味のある人であれば専門・職種を問わず出席を呼び掛けた。そして、FD的な部分をあえて肯定すべく、学内の関係委員会に共催をもらった。こうして、ワークショップのテーマについて、ある種の当事者意識を持つ参加者が集まった。参加者の「レディネス」の背景には、こうした事前準備が何らかの影響を及ぼしているように思う。

結果的に、準備段階での専門性に係る逡巡が杞憂であったことに、そして、この企画が「多民族社会における宗教と文化」共同研究グループに本質的な意味でふさわしかったことに、アンケートを読んで改めて思い至った。複数の異なる民族の相互関係を叙述することが本研究グループの姿勢であるとしたら、教室という空間こそは、他者どうしの相互の関わり場に違いないのである。そして、こうした姿勢はそのまま、「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」の背景にある複言語・複文化主義の「一人ひとりの中に、複数の言語が内在していることを互いに認め合い、そのことによって、より豊かな議論ができるようにする」<sup>4</sup>ためにできることを考える立場を想起させる。所属する大学の違い、所属先での自分の社会的「顔」(教員、職員、学習者……)の違い、性別、年齢差などによる意

<sup>4</sup> 細川英雄「相互文化性の研究指標を求めて—あとがきにかえて」細川英雄・西山教行編『複言語・複文化主義とは何か ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』(くろしお出版、2010年) 175ページ。

見や視点の相違こそが、グループワークにおける「もっと話したい、もっと聞きたい」の相乗効果を生んでいた、本企画の参加者たちが次第に獲得していった立場の相似形ではなかったろうか。「現在、言語と呼ばれているものは（中略）最終的には、人の数だけある」<sup>5</sup>という複言語・複文化主義の立場が肯定されている教場を体感できることは、対話型の授業デザインを模索する者にとって、それ自体が理想的なFD研修なのに違いない<sup>6</sup>。

企画を振り返って実感するが、「このワークショップでは（自分はいつもとは）全然違いました。もっと話したい、もっと聞きたいと思えました」という声はなぜ生まれたかについて、答えは容易には導き出せそうにない。ここに報告した、ワークショップの手法や工夫は、それを模倣しさえすれば対話型の授業デザインを作れるという、いわば特効薬ではない。なぜなら参加者たちによる企画主旨への主体的な賛同は、参加者の主体性が相互行為的に関与した結果であり、したがって法則性のものよりむしろ一回性のものだからである。その相互行為の生成過程は「動態的」<sup>7</sup>にしか捉えられない。ある参加者（教員）は、「実際に今中先生の授業をうけている学生と話して、グループにわりふられてディスカッションをするときの主体的な気分や、どういうふうなときに意欲がわくのかを具体的に聞くことができ」たことで、「自らの教員としての在り方を考え直すことができた」と述べた。このことは興味深い。教場にとって大切なのは「どうやればうまくいくか」——私たちは往々にして、このことにばかり意識を向ける——だけではなく、その場に関与する一人ひとりが自らの生き方それ自体を、他者に向けて開く姿勢を持ち続ける——動態的に——ための試行錯誤なのだ。そう考えると、我ながら、「フランス語・フランス文化に係るレクチャーを、主として外国語科目担当教員とその学生の10数人程度のこぢんまりとした聴衆を念頭に」企画するだけの思考停止を離れ、教育実践の広いフィールドへとすそ野を広げて参加者を募ったこともまた、専門性と称される安全地帯そのものを問い直す試行錯誤の一過程だったかもしれない。

今中氏が2018年3月に発表したフランス語の新教科書『アクティヴ！』<sup>8</sup>のはしがきは、その分量の短さ（教科書はたいてい、はしがきで教育理念や編集意図を1ページたっぷり使って説明するのが通例である）と、終わりの2行が印象的である。「この教科書で学ぶことで、単にフランス語を使えるようになるというだけでなく、あなたの今後の活躍の場がひろがっていくことを願っています」。この教科書が編まれたのは、仕方なく履修する「ニガイ」（第二外国語）のためでないのはもちろんのこと、学習者に媚びる「楽しい」授業づくりのためでも、さらには教授法という虎の巻の開示のためでもなく、教場という、学習者が他者と関わることによって人生を拓く場への期待ゆえなのだ

<sup>5</sup> 同上。

<sup>6</sup> なお、今中舞衣子氏は、細川英雄編纂の『キャリアデザインのための自己表現 過去・現在・未来を結ぶパイオグラフィ』（東京図書、2017年）にも共著者として参加している。

<sup>7</sup> 「interculture のinterとは何か。ここでは、inter を、二つ以上のものが相互に作用を及ぼし、互いに影響を与え受けあう関係をさす用語として定義することができよう。この関係は、きわめて動態的であり、実体として固定化することが困難なものである」「それぞれ複数のことばを持つ個人が、揺れ動くそれぞれの文化を互いに交換しつつ社会を構成するという自明の課題において、動態的な文化を相互に交換し、それを自らに取り入れつつ、またさらに他者とのやり取りの中で、文化間仲介者としての自己を再構築・再更新していくという教育実践とは」（細川、2010、177ページ）。

<sup>8</sup> 今中舞衣子・中條健志『アクティヴ！』（白水社、2018年）。

ろう。そして教場とは、能書きによってではなく実践によって現出するものであり、その実現と、その実現のための思索（主体性）と相互行為（協同性）を叙述できるのは、あるいは叙述したくなるのは、教科書の作成者でもそれを使って授業をする教師でもなく、「授業の主演」である学習者である。このことはおそらく、教育が、能力を育むだけでなく人じたいを育てる（あるいは育て合う）挑戦である限り、フランス語科目だけでなく、他の教育領域にも関わることに違いない。

あの12月の教室のなかで、専門領域も職種も年齢も異なる人々の間に、ゆるやかに生まれ始めた共同体意識の前提には、こうしたことがあった。実施後アンケートの提出率の高さが何を物語っているのかを、以上を踏まえてこれからも考え続けたい。